

第6章 まとめ

今回の年報では、2007年度に実施した発掘調査と、2006年度調査の、その後の整理作業を通しての成果を中心に報告してきた。

まず、2007年度の調査は、面積的にはあまり大規模なものではなかったが、注目される成果があった。庄・蔵本遺跡・医学系総合実験研究棟Ⅲ期改修その他工事地点においては、弥生時代後期後葉～終末期にかけての大規模な開析流路SR03が検出された。この流路は、今までの調査で、蔵本キャンパス西端部から、しばらく東流したのち、第18次調査ゲノム機能解析センター増築地点付近で北向きに流れを変えて、さらにその北方の、第5次調査動物実験施設地点において、蛇行しつつ北流していることが確認される（徳島県教育委員会・徳島大学埋蔵文化財調査室2008）。今回の調査地点は、さらにその北方に位置し、やや北東方向へ流れをかえていることを確認できた。弥生時代前期末・中期初頭をもって開析流路は庄・蔵本遺跡付近にはみられなくなったが、この時期にいたって、ふたたび展開することがあきらかとなり、その流路の位置を、ほぼ復元することができた。

庄・蔵本遺跡・西病棟新営その他電気設備工事地点では、弥生時代前期の土坑を6基確認した。特筆すべきは、弥生時代前期初頭の土坑SK02を検出したことであろう。庄・蔵本遺跡は、かねてより古式の遠賀川式土器の出土はみられたものの、局所的に少ない資料がみられるにとどまっていたのが実態であった。しかしながら、SK02では、器種構成が把握できるほど豊富な資料が出土した。また、付近は弥生時代前期初頭の遺構がほかの地点よりも多くみられることがわかり、また、弥生時代前期末・中期初頭以降の遺構とも、ほぼ同一の遺構面において検出できることも把握できた。蔵本キャンパス東南端付近は、庄・蔵本遺跡でも、いち早く微高地の形成が進んでいたことをあきらかにすることができた。

SK02出土の遠賀川式土器壺のなかに、流水文を施したものがみられた点も、特筆すべき成果である。従来縄文時代晩期後葉の工字文土器と、弥生時代前期後葉～中期に盛行する流水文とのあいだには、2～3小様式ほどの時間的空白がみられたが、この資料によって、工字文土器と流水文土器との接点をとらえることが可能となったのである。徳島地域は、縄文時代晩期末に無文化する傾向の強いほかの西日本地域とは異なって、有文土器を発達させる数少ない地域のひとつであり、流水文土器の成立と展開に一定の役割を果たした可能性が高くなったといえよう。

常三島遺跡・総合科学部1号館エレベーター建設に伴う調査と、その周辺の立会調査では、出土遺物こそ少ないものの、当該期の屋敷境溝を検出するとともに、武家屋敷形成前の自然地形が相当の起伏をもっていたことがあきらかとなった。常三島遺跡の調査は、東側の工学部エリアが中心であったため、西側の総合科学部エリアの様相はまだ十分にはわかっていないため、今後の調査にあたって、貴重データになったと評価できよう。

第5章では、おもに庄・蔵本遺跡2006年度調査西病棟地点の中間報告を中心におこなった。この調査では、国内3例目となる弥生時代前期の畠遺構が検出され、その機能面・年代面からの分析を軸に報告した。プラント・オパール分析第1報（株式会社古環境研究所2009）では、ほかのイネ科栽培植物が検出できなかった一方で、生育初期段階（苗）を含むイネのプラント・オパールが検出され、苗代が選択肢の1つとして浮上することとなった。今回は苗代説を掘り下げる意味もあって、1999年度調査中央診療棟地点（第2図17）と、2006年度医学系実験研究棟Ⅱ期改修地点（第2図19）の弥生時代前期の水田遺構にかかわるプラント・オパール分析を第2報としておこなっている。両調査区が水田であることを補強するデータはえられたが、苗代説を補強するにはいたっていない。畠遺構付近の土壌サンプルはまだ残されているので、今後も分析を継続する所存である。

プラント・オパール分析について、今回花粉分析の成果を報告した。花粉については、あまり残りがよくなかったため、栽培植物を推定するようなデータをえることはできなかった。

いずれにせよ、まだ土壌サンプルは残されているし、土壌の軟X線画像分析なども依頼している。今

後もこれらの分析を継続していきたい。

現時点では畠遺構の機能を絞り込むにいたっていない。苗代とともに可能性があるのが、雑穀類の畠である。灌漑溝SD312から畠遺構への水口から出土した炭化種子のなかに、イネのほか雑穀類がみられることは、すでに報告済み（国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室2009）であったが、今回その雑穀種子の一部を年代測定試料として提供し、その鑑定もおこなった（いずれも国立歴史民俗博物館に依頼）。鑑定の結果、イネのほかアワ、キビ（細長い独特の形態）、マメ科植物の一種を確認することができた。これらも、この畠で栽培された作物の候補となろう。このほか、SK313出土炭化種子中にも、エゴマ類似種子が確認できた。種子の大半は残して保管しているが、これらも現在鑑定依頼中である。

庄・蔵本遺跡では、1982・83年度体育館地点（第2図2、徳島県教育委員会・徳島大学埋蔵文化財調査室2005）土坑308（弥生時代前期末）からも、多量のアワ炭化種子（松谷2010）が検出されている。庄・蔵本遺跡は、徳島県下で最大級の弥生集落であり、弥生時代前期は相当規模の灌漑水田稲作を営んでいたことがあきらかとなっている。しかしながら、この2地点での雑穀種子の出土により、雑穀類も、決して看過しえない存在であったことが判明したのである。なお、庄・蔵本遺跡を含む鮎喰川東岸の遺跡群では、弥生時代前期末・中期初頭をピークに、地形環境の変化によって、灌漑水田稲作経営を放棄せざるをえない状況に陥っている。その後も、弥生時代前期を上回るような規模での灌漑水田経営は、地形環境や河川環境、降水量などの自然的背景に阻まれて、相当の期間進展がみられなかったことはあきらかである。吉野川流域では、少なくとも古代以降は、畠作中心の農業経営をおこなっていったことが、文献・絵図資料の研究から指摘されてきている（丸山1989など）。今後は、弥生時代中期前葉以降の農業の展開について、畠作を視野において調査研究を進めなければならないだろう。この意識こそが、畠作関連の遺構・遺物を検出する調査技術を高めるものであろうし、稲作を中心に描かれた西日本の弥生時代像の再考を促すきっかけとなる可能性をも秘めているのではあるまいか。

雑穀種子は、いずれも0.5mmメッシュのふるいをもちいたフローテーション法によって検出している。この調査法は、西日本の縄文・弥生時代遺跡の調査・研究において十分に普及しているとはいえない状況にある。雑穀類の出土例がおもいのほか少ない一因も、ここにあるといえるのではなかろうか。庄・蔵本遺跡1982・83年度体育館地点土坑308出土のアワは、偶然塊状となって炭化していたものであるし、後述の滋賀県蒲生郡安土町竜ヶ崎A遺跡出土のキビ（松谷2006）も、土器の内面底にこびりついた事例である。イネへの過剰なまでの固執が招いているともいえるこの現状を打破できるのは、地道な作業の積み重ねしかあるまい。今後の大きな課題である。

灌漑溝SD312から畠遺構への水口出土炭化種子の年代測定は、いずれも弥生時代前期中葉という、発掘調査時の年代的所見と矛盾のない数値をえることができた。西日本の縄文～弥生時代遺跡出土雑穀種子の年代測定は、竜ヶ崎A遺跡の縄文時代晩期末のキビ（小林ほか2006）をのぞいて、まだ十分におこなわれていないため、今回の結果は貴重なデータとなるであろう。

一方、畝4出土の炭化物は、弥生時代前期末・中期初頭に相当する数値であり、炭化種子の測定値とのあいだにずれがみられた。しかしながら、第5章第5節にみられるように、株式会社加速器分析研究所に依頼した、畝1とSU302出土炭化物はいずれも弥生時代前期中葉とみて矛盾のない数値をえている。畠遺構埋没後（第25図の1層上面相当）に、付近には弥生時代前期末・中期初頭の居住域が営まれており、国立歴史民俗博物館に提供した畝4の試料は、このころの炭化物が混入したものであろう。畠遺構は、層位的には、ほかのSK313やSD315と同一面にて検出されており、これら諸遺構の測定値も、弥生時代前期中葉とみて矛盾のない数値である。

まだ試料は残されているので、今後も年代測定を重ね、発掘調査時の年代的所見を補強したい。いずれにせよ、畠遺構が弥生時代中期初頭より古いという事実は動かない。

文献

株式会社古環境研究所2009「庄・蔵本遺跡西病棟建設予定地におけるプラント・オパール分析1」『国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室 年報1』国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室、p36—44。
国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室2009『国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室 年報1』

- 小林謙一・遠部 慎・春成秀爾・新免歳靖2006「竜ヶ崎A遺跡出土土器付着物の¹⁴C年代測定」『ほ場整備関係（経営体育成基盤整備）遺跡発掘調査報告書33—1 竜ヶ崎A遺跡』財団法人滋賀県文化財保護協会, p179—184.
- 徳島県教育委員会・徳島大学埋蔵文化財調査室2005『庄（庄・蔵本）遺跡—徳島大学蔵本団地体育館建設に伴う発掘調査報告書—』
- 徳島県教育委員会・徳島大学埋蔵文化財調査室2008『庄（庄・蔵本）遺跡—徳島大学蔵本団地動物実験施設建設に伴う発掘調査報告書—』
- 松谷暁子2006「竜ヶ崎A遺跡出土土器付着炭化粒のSEM観察による識別」『ほ場整備関係（経営体育成基盤整備）遺跡発掘調査報告書33—1 竜ヶ崎A遺跡』財団法人滋賀県文化財保護協会, p173—178.
- 松谷暁子2010「庄遺跡出土炭化粒の識別」『庄（庄・蔵本）遺跡—徳島大学蔵本団地体育館器具庫・医学部臨床講義棟建設に伴う発掘調査報告書、体育館建設に伴う発掘調査報告書補遺—』徳島県教育委員会・国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室, p56—66.
- 丸山幸彦1989「古代の大河川下流域における開発と交易の進展—阿波国新島庄をめぐる—」『徳島大学総合科学部紀要（人文・芸術研究篇）』2, p1—27.